

野村再生工場
—叱り方、褒め方、教え方—

“Nomura Saisei Koujo” (Nomura Recycling Plant)
—How to scold, praise, and teach—

伊藤 公俊*, 窪田 辰政*, 森脇 保彦**

Masatoshi ITO*, Tatsumasa KUBOTA* and Yasuhiko MORIWAKI**

野村再生工場
—叱り方、褒め方、教え方—

“Nomura Saisei Koujo” (Nomura Recycling Plant) —How to scold, praise, and teach—

角川書店

Kadokawa Shoten Publishing Co., Ltd.

野村克也 著
NOMURA, Katsuya

「自分の力はこんなものです…」。伸び悩み、自分の能力に限界を感じて挫折を味わう人間は少なくない。そんな人間が自信を獲得し、能力を伸ばしていくことを著者は再生と呼ぶ。世間からはもはやピークを過ぎたと思われた野球選手たちを次々と再生させてきた著者には、いつしか野村再生工場の異名がついていた。自信を失った選手、向上心を持たず負け犬根性が染み付いたチーム、そんな弱者を再生させていった経験を、本書では指導者の目線で語っている。各所における「指導者は…」、「指導者たる者…」との書き出しが、指導者のあり方というものを強く示している。本書

は、著者自身が通ってきた野球の道を題材に展開されていくが、人格形成や人間教育といった著者の理論の及ぶ範囲は、野球やスポーツにとどまらない。随所に「組織」や「上司」といった表現も散りばめられており、あらゆる教育現場やビジネスシーンにも活用できることは間違いない。

再生は、選手に失った自信を取り戻させることから始まる。著者は、「失敗」と書いて「せいちょう」と読むと言う。そしてその失敗が成長に結びつくためには、結果ではなく過程が非常に重要なのだ。よく考え、十分に備えた上での失敗は、必ず次に活かすことができる。そのために指導者は、予め選手に意識付けをしておく必要がある。その、目の覚めるような方法の詳細は本書に譲ることとする。指導者が再生を試みる上で最も大切なことは、闇雲に選手の尻を叩くことではない。選手を徹底的に観察し、選手自身に「気づかせる」こと、つまりやる気にさせることなのである。選手自身が「復活してやる！」と強く思わない限り、指導者が意気込んだところで再生は望めない。著者は、多くの指導者が陥りやすい誤った指導法を事例として取り上げつつ、指導者の能力如何で選手の人生は良くも悪くも大きく変わってしまう、

* 静岡産業大学 (Shizuoka Sangyo University)

** 国士舘大学 (Kokushikan University)

との苦言も呈している。

以上に述べてきたように、著者は野球の技術よりも、選手の人間的な成長に重きを置いている。それは自身に「人間的成長なくして技術的成長なし」という信条があるためである。選手が十人十色なら、選手を伸ばすためのアプローチも十人十色である。そのために指導者には、先入観や固定観念の一切を排して選手を観察し、よく「気づく」能力が必要なのである。そしてそこからさらに各々に適切なアプローチをもって「気づかせる」ことが求められる。選手をよく観察する、一見して簡単なことでありながら、ほとんどの指導者がおろそかにしがちな部分である。「気づかせる」ための方法を説く指導書は多いが、「気づく」ことの重要性を説く指導書は数少ない。再生の極意はまさに「気づき」にある。

「自分の力はこんなものです…」。そうして下を向いていた人間が、目を輝かせて活躍するようになれば、まさに指導者冥利に尽きるのではないだろうか。選手のレベルアップを促す多くの技術書とは異なり、本書は指導者のスキルアップを喚起する新しい技術書である。自身の指導法に疑問を持つ指導者。成績の伸び悩む生徒を支援したい教師。そんな方々にぜひ一読していただきたい一冊である。